

ていない。ラーオ系タイ人は、北タイの井堰を意味するファーイと同じ呼称を使っている。カンボジアではタムノップと呼ばれ、少なくともシナムレアプ周辺では今日でも盛んにタムノップが作られ、機能している。また、タムノップという語は、タイ語、ラーオ語では意味をもたないことから、クメール語に起源すると思われる。アンコールのバライが灌漑に使われたかどうかについては、近年、疑義が提起されているが、バライが灌漑用ではなかったとすれば、タムノップによって灌漑されていた可能性が高い。

## シンポジウム報告要旨

### (趣旨説明) 東南アジア史学の方法としてのオーラル・ヒストリー

中野 聡

今大会シンポジウムでは、東南アジア史学の方法としてのオーラル・ヒストリーの意義と問題点を検討する。史的方法の検討という点では、前回の大会シンポジウム「通史を考える」と連続性をもつ企画であるが、歴史叙述という史学上の作業のいわば出力部分にあたる問題を検討した前回に対して、今回は史料の収集・批判といういわば入力部分にあたる問題を、東南アジア史研究の実践の現場から考えようとするものである。

オーラル・ヒストリーは、その最も広義の意味では過去についての人間の「語り」全てを包摂し得る概念であるが、歴史学の方法としては「現存する(した)人々」からの聴き取りを史料として用いることと定義できるだろう。過去に第三者によって記録され文字化された口述史料はもちろん、口承・伝承や慣用句の史料としての利用なども、後者に含めることが可能である。このシンポジウムでも、「語り」としての広義のオーラル・ヒストリーを検討対象に含めながら、「東南アジア史学の方法」をめぐる問題としては、とくに、研究者が直接に収集・利用して、記録の出版ないし研究を通じて公開しようとする狭義のオーラル・ヒストリーに検討の焦点をあてたい。

公文書を頂点として私文書を底辺とする記録史料への依拠にのみ方法上の正統性を与えるランケ的な近代の実証史学において、オーラル・ヒストリーは厳密な客観性や実証性に乏しいものとして低い地位しか与えられてこなかった。しかし民衆史あるいは社会史研究の台頭がもたらした歴史研究の対象の拡大とともに、非文字史料の収集・利用が歴史学の実践として広がるなかで、オーラル・ヒストリーは、歴史学の正当な方法として、あるいは正史や公的記憶に対抗する歴史をめざす一種の「市民的」記録運動としてもその地位を高めてきたと言ってよいだろう。

その一方、ポストモダニストたちによって近代社会科学の実証主義そのものが認識論的な批判をあび、記録史料に依拠して客観的に語ることの正統性を文献史学が無前提には語れなくなってきたことや、現実を正しく科学的に記述するという意味での民族誌的リアリズムの権威が人類学において揺らいできたことは、史的方法としてのオーラル・ヒストリーにも、当然、重大な問題を投げかけている。「記録者」と「語り手」の間の、あるいは「語り手」やその「語り」をとりまく関係性が介在せざるを得ないという点で、口述史料には記録史料以上に「客観性」や「実証性」を語ることが難しく、また人類学が民族誌の調査と記述において直面してきた問題は、多くの点で口述史料の収集とその利用をめぐる問題と共通しているからである。さらに、これらポストモダニスト的な社会科学批判の議論を借りずとも、「記録者」と「語り手」の関係性をめぐるオーラル・ヒストリーの諸問題は、文献史学からの口述

史料の信頼性に対する古くからの批判と重なり合うところが多い。だとすれば、結局のところ、オーラル・ヒストリーの方法上の問題は厳密な意味での史料批判論へ帰着すると考えることもできるだろう。

以上のような、オーラル・ヒストリーと史料批判をめぐる諸問題を念頭におきながら、今大会シンポジウムでは、東南アジア史学におけるきわめて具体的で実践的な課題として、この問題を考えてみたい。東南アジア固有の地域的特性と史料状況を背景として、歴史学に限らず、政治学、社会学、人類学などを含めて多くの東南アジア研究者が、オーラル・ヒストリーを、全面的にせよ補助的にせよ、不可欠の史的方法として採用しつつあり、われわれは何よりもまず実践上の問題としてそれを捉えていくことが必要だからである。そして、欧米や日本の歴史学や社会学においては、すでに年輪を刻んできたと言っても良いこの問題に東南アジア史学の方法として今日の時点で取り組む意義も議論してみたい。

そこで、本シンポジウムでは、オーラル・ヒストリーをその史的研究のなかで積極的に実践しつつある3人の会員に、まず、それぞれが、なぜオーラル・ヒストリーという方法を用いるに至ったのか、それまでの当該分野の研究史を踏まえたとき、オーラル・ヒストリーが、どのような新たな領域を切り拓き、貢献をされると考えられるのかなどを、個々の研究とその領域における他の研究を紹介しつつ、具体的に指摘していただく。そのうえで、過去の再構築のためにオーラル・ヒストリーを利用する場合の史料批判上の諸問題、さらには歴史学の方法について、それぞれがどのような経験をしてきたか、どのような認識・態度をとるに至ったか、あるいははたしてしているかを論じていただく。そして、シンポジウムの各報告と討論を通じて、オーラル・ヒストリーの実践上の諸問題さらには歴史学の認識と方法の問題にも迫ることを大いに期待したいと考えている。

## 口述史の可能性と諸問題ーインドネシア華人社会史研究のとは口から

貞好 康志(神戸大学)

報告者は元来、インドネシアの国民統合における「華人問題」の変遷を、政治史ないし政治思想史の観点から主に文献史料を用いて辿ってきた。5年ほど前から「華人社会」のあり方そのものに対象を定め、中部ジャワの町スマラン周辺で幾度かフィールドワークを行った。華人の居住・活動範囲が旧華人地区から空間的に拡散し、スハルト体制による「同化政策」も手伝って、華人コミュニティの姿が目に見えにくくなった現在、華人社会とその歴史に接近する重要な単位は個人や家族である。族譜を編むことさえ稀なジャワ華人の個人史・家族史ひいては社会史を再構成しようとするれば、オーラル・ヒストリー(=口述史)の手法に大きく頼らざるを得ない。口述史を主たる方法として華人社会史を書いた先例は少なくともインドネシアに関してはほとんどなく、報告者にとって、依然手探りの状態が続いている。今回はそうした模索の過程で認識するに至った、口述史の可能性と問題点を報告者なりに仮整理し、議論の材料に供したい。

口述史のポジティブな可能性としてしばしば指摘されるのは、①文献史料があまり対象とせず、自ら文字史料を残すことの少なかった庶民や女性などの生きた歴史を再構成する主材料になり得るということである。この点はカピタンなど旧支配層や近現代の財閥などに対象が偏ってきた華人研究についても当てはまる。また口述史料は、②文献史料で欠落したり見落とされがちな、現場の実態に迫る手がかりとして有用なことが多い。多面的な